

寄り添い、支えあった仲睦まじい夫婦のお墓

第7回には埼玉県上尾市の村上 勇さんのお墓が入賞した。私達夫婦のお墓は生前墓です。日頃書いている絵や書の一枚をそのまま原画としてつくっていただいたものです。



第8回では長野県諏訪郡の幅谷 セツコさん(当時70歳)の4本の石柱が寄り添う家族を象徴したお墓が入賞した。お墓は家族の終のすみか。自然石(砥川石、安山岩)の形をそのまま利用し、4つの部分に切り、家族の寄り添う姿を表しています。また、自然石を使用することで、自然への回帰と自然に抱かれる人間を表現しています。家族とデザインを依頼した彫刻家との何度かの打ち合わせの末に出来上がった形です。北アルプスのもと安曇野に作られた家族墓地です。また家族内の宗教の異なりを受け入れるものでもあります。>



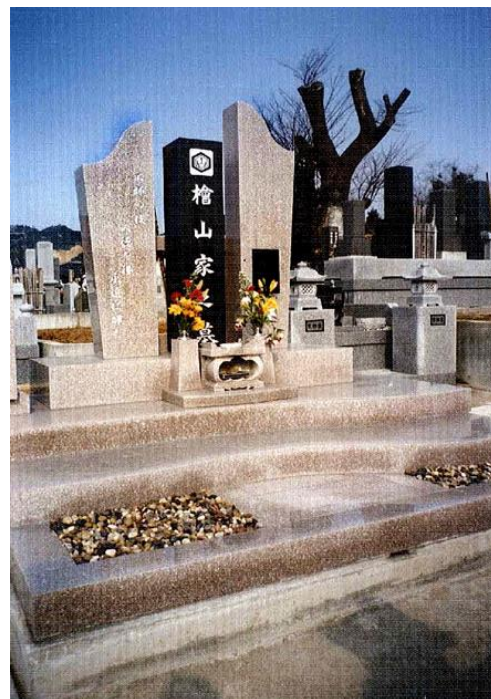
第8回では、仲睦まじい道祖神と自作の書入りお墓で静岡県伊東市の安齊 昭子さんが入賞した。生前の夫婦仲の良さがにじみ出ているお墓となっている。<それは還暦祝を間近に控え楽しい計画を考えていた頃であった。「元気印」

の優しい夫が病死するなんて。初七日に私も受戒し、戒名をいただきました。その3ヶ月前、私が初めて書道展に色紙を出品するとき、亡主人は、奥が深い「道」という字を選んでくれた。そして自ら私の名前の印を篆刻してくれました。それを書き終わった色紙に押し、出展しました。「私達らしい」。いつまでもほほえましい姿を道祖神に托し、その二人の最後の思い出の作品と共にお墓に記していただきました。道祖神は石屋さんの紹介で東京の若手作家にお願いしました。>



第11回では茨城県日立市の桧山 三枝さん（当時60歳）が夫婦の身長の高さの墓碑2本のお墓で入賞した。

夫は日立製作所に勤めた技術屋でした。夫が亡くなり、今年3月にお墓を建てました。向って右側に夫の身長170cmの石柱を、左に妻である私の身長150cmの石柱を並べました。夫の石柱の中には、これまでいただいた感謝状などを入れました。昨年の4月上旬、桜が満開の時に亡くなったので、石柱は桜石を使いました。



第17回では静岡県富士市の佐野 文さんの

曲がりくねった2つの石柱に思い出の地名、夫婦の歩んできた「道」を表したお墓が入賞した。亡き妻と私の2人の記念碑です。建築士の私が、想いをデザインしました。お墓というより、2人で歩んできた人生をカタチにしたかった。両側の曲がりくねった2つの塔は、私たち夫婦の歩ん

できた「道」です。

それぞれ、身延と登別で生まれ、19歳で小樽で出会い、富士での結婚生活。象嵌の「星」は2人の生まれた場所、そして「ハート」は出会い、結婚と愛を育んだ場所を表します。中央に3つ重なる緑色の御影石は、3人の子供を象徴し、2人の歩みを彫刻で表現しました。

墓石の前のグラデーションの円は、ひまわりのように元気で明るく、多くの友人が集まり人の輪が広がっていたことを表現しています。「人とのつながりを大事にする」。家族の大切な場所になりました。



第18回では山梨県北杜市の椎名 武志さん(当時72歳)のお墓が入賞した。

山梨県の椎名武志さんのお墓は、メルヘンチックなできあがり。小さな藁葺きの庵(閑人庵)があり、S字型の道が描かれている。そして「語」の文字。背の高い碑石は山並みをイメージし、心静かに小さな庵(いおり)で、夫婦二人心静かに最後を迎えたいという願いが込められる。道は天(あるいは浄土)へ上る道、二輪草は夫婦を表している。この場所が語らいの場になるように、という想いで「語」の文字を刻んである。



第22回では群馬県富岡市の加藤 辰五郎さん(当時80歳代)が入賞した。

一針一針縫ってきた道が続いている。二人で歩み始めたその日からずっと続いている。今揃って振り返るとすばらしき人生だったと思う。二人の思いを縫い合わせてでき上がった道だと改めて思う。

子育て、仕事に夢中だった日々。二人とも教員として忙しかったけれど、子ども達の輝く顔は何ものにもかえ難かった。自分の子どもと、学校に来る子ども達の成長とを実際に感じる事ができたのは何より幸せであったと思う。

我が子の子育てに迷ったり、仕事でどうしていいのかわからなくて悩んだりした事も今では懐かしくさえ思える。退職後、本格的に取り組んだ写真やはがき絵を通じて自然の豊かさに感動し、人との出会いに感銘を受けた。この思いから墓石正面には、『縫』(妙義山麗美術館のはがき絵展出品の妻の受賞作品)と刻みました。そして裏面には『ひと針ひと針縫うように、一步一步前向きに、一瞬一瞬の自然に感動し、ひと筆ひと筆に心を込めて、一人一人との出逢いを大切に、人生を縫い上げた証としてここに刻む』と彫って頂きました。

